シドニー視察旅行記（4）

～首都移転を果たしたキャンベラ Canberra～

シンクタンクチーム座長　三井 元子

２日目に、オーストラリアの首都キャンベラを訪問した。今回の視察旅行を企画してくださった有岡正樹さんが、３時間半かかっても首都移転したキャンベラは、ぜひ見せておきたいからと行程に入れてくださったのである。

写真１　連邦議事堂を望むロード

１．壮大な首都構想

CNCP 通信 Vol.46 の宮下裕美さんの旅行記にあった通りで、都合４時間掛かって首都キャンベラに着くと、まず目に入ってきたのは、大きな人工湖の噴水（写真２）であった。その巨大な高さに驚かされる。インフォメーションセンターに行くと、首都構想の全体が分かるジオラマが展示してあった。国会議事堂から伸びたロードの真正面に戦争記念館がある。そのロードを挟んで左右対称にまちがデザインされており、美しい。キャンベラの場合は、道路が放射状に広がっており、碁盤の目ではなく点対称である。市街地は各地区の中心地に商業・サービス施設のほかに行政サービス施設や民間オフィスが立地するように計画されており、さらに富裕階層、低所得階層の集中を防ぐため、各サバーブ（町名）ごとに低所得者向け公営賃貸住宅を配置しているという。

写真２　グリフィン湖の 150m の噴水

CNCP メンバーたちが、「日本の平安京や平城京のように都市設計された遷都だ」とささやいているのが聞こえた。なぜこれほどの壮大な都市計画が、着々と進められ実現に至ったのか。その意思決定のプロセスに興味を持った。日本の首都移転計画の話は、どこへ行ってしまったのだろうか。今年２月 17 日、「国会等移転審議会委員は 2000 年 12 月以降任命されていない」という新聞記事が目に入った。やっぱり現代日本はだらしがない。

２．オーストラリア開拓から連邦主都建設への長い道のり

17 世紀初頭にヨーロピアンによってオーストラリア大陸が発見されるが、本格的な探検は、1770 年のイギリス人ジェームズ・クック船長によると言われている。その後イギリスは、囚人流刑地としての植民を行い、やがて自由移民を受け入れていく。次々と植民地開拓が進み現在の 6 州が形成されていった。19 世紀中頃から政治的統合の必要性が議論され始め、1901 年、ついに連邦国家が結成され、統一された独立国家となった。

写真３　トライアングル都市計画

その過程で、連邦政府をどの州に置くかという誘致合戦が、ニューサウスウェールズ植民地の主都のシドニーとビクトリア植民地の主都メルボルンとの間で激しく続き、決着が付かなかった。そこで 1897 年の憲法制定会議において「シドニーから 100 マイル

以上離れた地域において、連邦が譲受または取得した領地内に新たな都市を建設する。完成までの間は、議会はメルボルンで開催する」という折衷案が提出され可決された。しかし、今度はニューサウスウェールズ州の中で誘致合戦が起こり、首都がキャンベラに決まったのはそれから 10 年後の 1908 年のことであったという。面積的には東京都とほぼ同じ大きさで 2,358km^2 で、州ではなく首都特別地域(ACT) と称されている。

そして 1912 年「基本的都市設計に関するアイデア」が国際的に公募され、137 点の応募作品の中から、米国シカゴの建築家ウォルター・バーレイ・グリフィンの作品が選ばれた。1913 年に礎石建設がされ、1926 年にメルボルンからキャンベラに連邦議会が移転される決議がされ、1927 年に連邦議事堂を竣工、キャンベラにおける初めての議会が開始された。ところが、第２次大戦があり都市建設は中断を余儀なくされる。戦後、（1950 年代はオーストラリアの鉱物ラッシュに重なる）連邦政府機能の充実と首都整備の必要性から、1958 年に改めて「連邦主都建設委員会」が結成され、1980 年代の 30 年間に、国防相をはじめとする諸官庁が移転、グリフィン湖、大蔵省・国立図書館が次々完成し、国立美術館・連邦最高裁判所が落成。1988 年に現在の連邦議事堂（写真４）が完成し、連邦政府直轄の主都建設は一通りの完成を見た。このように、キャンベラは 1912 年のグリフィン案を土台にして、拡張・修正しながら展開し、完成までに実に 76 年が経過したわけであるが、その意思は貫き通され、計画性をもって整備されてきたことが分かった。

しかし、人口がオーストラリア国内で 8 番目（約 37 万人）とはいえ、政治都市であり、そこに住む中枢の官僚が、経済・産業の実態に触れる機会が少ないのではないかといった批判を浴びることが多いという。せめて30年前有岡さんらが駐在中に提案されていた、「シドニー～メルボルン新幹線構想」が実現されていたらと思った。

写真４　連邦議会議事堂

３．連邦議会議事堂

いよいよグリフィン湖を渡り、連邦議事堂へと向かう。写真４に示すように真っ白な巨大な建物と屋上の中央に聳え立つ国旗掲揚塔が、シンプルだが美しい。建物中央の頂上には、カンガルーとエミューをデザインした国章モザイクが銀色に光っていた。

国旗と国章（=国民）の足元に議会があるということを象徴しているのだそうだ。旧議事堂は現在オーストラリア民主主義博物館として公開されている。

建物内部に入ると木材を多用に使用した清廉な空気のエントランスがあり、上の階に上がると歴代首相の肖像画が並んでいた。解説員が、議会制度について品格のあるイギリス英語で説明をしてくれた。オーストラリアは、完全に独立した議会制民主主義国家だが、正式にはイギリスの女王エリザベス 2 世が、オーストラリアの女王であり、その代理としてオーストラリア総督(Governor-General) を任命される。議会は上院・下院の２院制で、議員数は上院 76 名、下院 150 名。内装がそれぞれ深紅と濃緑で統一されていた。

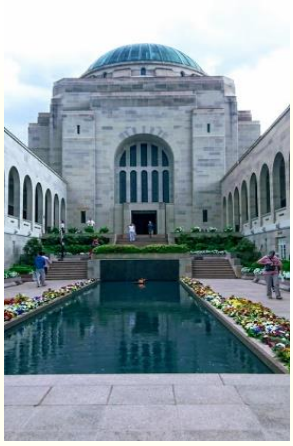

写真５　戦争記念館

その後、私たちは戦争記念館(写真５)へ行き、その裏山に当たる Mount Ainslie から、市街地全体を眺望した。（写真１）

帰り道、夕暮れのハイウェーで丘の上にすっくと立ち上がるカンガルーの家族を見ることができ、オーストラリアのドライブを満喫した一日であった。（感謝）

※参考文献：「世界の主都移転」山口広文著　　㈱社会評論社発行
「オーストラリア歴史物語」ジェフリー・ブレイニブレイニー著　㈱明石書店発行。